

論文

# 神話理論の新定義に向けて

バロソ・イザベル

## Towards a New Definition of Myth

BARROSO, Isabel

### Abstract

What does Myth mean and what is its purpose? Since 20<sup>th</sup> Century, when Absolute Truths began to be questioned, the hidden ideology beyond mythological discourse has been the focus of a great number of Mythologists researches. Gender Studies or Marxist Criticism emphasized the importance of the discourse behind the words, to be found in any kind of literary production.

As for Japanese Myth, some aspects about Amaterasu or Izanami figures can lead us to think about the role of sexual repression, as much as women coercion, in the society-modelling aspect of Myths.

Another point to be considered in this paper is the role of alternative discourses, as opposed to the Ideology of Power, and its suffocation - being labeled as Rebels or Alienated, in terms of hidden discourse. Those alternative ideologies leading, by the other hand, to Antipsychiatry or New Age Myths.

### 要旨

「神話」とは何か。神話が記録される理由、即ち神話の中に隠されているイデオロギーとは何であるうか。

19世紀にはドグマとして考えられた「神話」の概念は、20世紀に入ると新しい思想のもとに改めて考えられるようになった。比較文学の中で「受容美学」が「テキストの不確定性」を指摘するなど、神話の意味も疑問視され、その「絶対的」・「客観的」な意味を失った。神話の歴史性や芸術性はともかくとして、「下部構造」、或いは「ジェンダー差」という提起が重要なものとなり、神話学研究の中心となる。

日本神話で、「アマテラス」や「イザナミ」の象徴性や役割を分析すると、月経などの「女性のもつ神秘性」の中に「性的抑圧」の意味が隠されていると考えられる。

さらに、「集団のアイデンティティを強める」神話の中に、社会に対するメッセージがどんな風に現れているのか。1950～60年代の反精神医学からニュー・エイジに表れるアルターナティブな文化が現代の神話のように考えられる。

### キーワード

「神話」(myth)、「イデオロギー」(ideology)、  
「受容美学」(reception aesthetics)、「抑圧」(repression) .

神話とは何か。神話の目的とは何か。それらの問いへの答えは、「事実」や「論理」の世界からかけ離れたと感じられる神話の「物語」の中にある隠された意味を理解することにある。

「神話」の概念には二つの意味が含まれている。一つは、神話とは文学的な物語だということである。その物語は、多くは詩の形で<sup>(1)</sup>、英雄の雄々しく勇敢な戦闘を述べている。そこでは、神話は歴史や伝説のような過去の物語であり、語られている事柄は事実に近いと認識されている。もう一つは、神話とは宇宙の起源を語る物語だということである。従って、神話とは宗教や哲学の観点から見て、世界の起源やその事実を説明できる、といえよう。

19世紀まで、神話は過去に行われた事実として考えられた。神話学の研究は「事実」と「伝説」、すなわち「真実」と「虚構」を区別すること、または神話の物語を証明できる歴史的資料を提供することが中心だった。さらに聖書解釈学の影響で、神話は宗教的な面から考えられることになった。その結果、神話が教理 (dogma) となり、トートロジーとして疑問視されなくなった。一例として、チャールズ・R・ダーウィン (Charles Robert Darwin) の『種の起源』が出版された時のスキャンダルを忘れることができない。ダーウィンの進化論によって、聖書の「創世記」が疑われ、『種の起源』がキリスト教に反すると感じた進化論反対主義者はダーウィンの研究をボイコットした。そして、今でも進化論を教えることが許されていない。また、マーティン・スコセッシ (Martin Scorsese) の『最後の誘惑』<sup>(2)</sup> (*The Last Temptation of Christ*) のような映画が上映される毎に、その映画に

対して数多くの討論がなされ、ボイコットやデモが何回もニュースになった。

宗教のことは別にして、神話の「歴史的な性質」に関する他の問題は、神話の物語には隠された「レトリック」があるということである。レトリックとはそもそもデマゴギー的なものをベースとしている。歴史は勝者を記録し、神話は権力者によって創られるからである。

従って、神話の用語は権力の側のレトリックであると言うことができる。その用語の仕組み、すなわちある物語に見られる隠された構造は、階級間または階級内の関係に基づく。20世紀の様々な文学理論によって、文芸は新たな局面から分析された。ジェンダー論<sup>(3)</sup>や階級闘争<sup>(4)</sup>の概念が強くなり、統一された均質な事実である世界が分裂され、様々な独自の小世界の群として考えられるようになった。

ジェンダー論やマルキシズム理論の非常に興味深い概念は、「抑圧」である。比較文学のジェンダー論は、シグムント・フロイト (Sigmund Freud) の精神分析の「昇華 (Sublimierung)<sup>(5)</sup>」の概念を中心にすえ、女性になされた抑圧 (ジェンダー抑圧・性欲抑圧) の結果として発見された「女性文学」の分析を始めた。

現代の比較文学のジェンダー論の基礎としては、フェミニズムの視点からイギリスのピクトリア時代の女性文学を分析したサンドラ・M・ギルバート (Sandra M. Gilbert) とスーザン・グーバー (Susan Gubar) の『屋根裏の狂女』<sup>(6)</sup> (1979年) があげられる。

社会的・政治的な視点から分析された権力者と「抑圧」の関係についての代表的な研究は、マルキシズムの立場に立つウィルヘルム・ライヒ (Wilhelm Reich)<sup>(7)</sup> やミシェル・フーコー (Michel Foucault)<sup>(8)</sup> であろう。比

較文学のマルキシズム論は、テキストに見られる隠されたイデオロギーを中心として権力の装置を研究の目的とする。

マルキシズムの比較文学評論家、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は次のように述べている。

私たちの行う事実陳述を支援しこれに根拠をあたえる価値構造、しかもたいていは隠されているそのような価値構造は、「イデオロギー」と呼ばれているものの一部である。「イデオロギー」という言葉を私が使うときは、それを、私たちが話し信じていることと社会の権力構造や権力関係を結びつける仕掛けといったくらいの意味に使っている。……まさに私たちの中に深く根づいている考え方であり、またこの考え方が社会の権力構造と深く結びつくことは確かにあるのだが、……

……こうした価値判断は社会的イデオロギーと密接に関係しているということだ。イデオロギーとは単なる個人的嗜好のことを指すのではなく、ある特定の社会集団が他の社会集団に対し権力を行使し権力を維持していくのに役に立つもろもろの前提事項の事を指す<sup>(9)</sup> (『文学とは何か』23～25頁)。

前述のように、20世紀に入ると世界は様々な独自の小世界の群として考えられ、それらの小世界は強制的かつ機械論的なもののもとに交じり合うようになった。少し時代を遡ってみよう。

中世からルネサンスへの飛躍は人類の思想に関して大きな変革をもたらした。宇宙に対して、中世の人々は地球中心説<sup>(10)</sup>のモデルに支配され、人間の世界の中心には神がいた。ルネサンスと共に地球中心説のモデルから太

陽中心説<sup>(11)</sup>のモデルへと進歩した。地球中心説のモデルからルネサンスの太陽中心説のモデルへの飛躍によって考え方のパラダイムは大きく変わり、ルネサンスは技術的・科学的に進歩を遂げた。同じように、20世紀にはアルバート・アインシュタイン (Albert Einstein) の相対性理論によって、アイザック・ニュートン (Isaac Newton) の宇宙モデルの理論も疑われ、科学・哲学の世界は大きく変化した。

中世では、人間の世界は神のみ心の中にあった。しかし、ガリレオ・ガリレイ (Galilei Galileo) の地動説理論によって宇宙の中心は地球から太陽へ移ったように、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) では世界の中心は神から人間へ移った。人間は「神のみ心に従わなければならない」という考えから、「自分の世界を作る」という考え方への変更であった。「Yes, We Can<sup>(12)</sup>」の世界へ、である。相対性理論によって、引力が絶対真実であるということを見失う。あるいは、「量子論」後は、「世界」は一つの事実として考えられず、分裂された事実として考えられるようになった。

世界は「絶対的」・「客観的」な事実ではないことによって、新しい哲学では「世界」や「事実」という概念に対して、人が持っている主観的な「知覚」が見出されることになる。すなわち、エドムント・フッサール (Edmund Husserl)<sup>(13)</sup>と現象学<sup>(14)</sup>の世界である。そして、その分裂された事実を示す道具は言語である。しかし、フェルディナンド・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure)<sup>(15)</sup>後は、言語も統一した言語として考えられず、「言語」と「言説」、すなわち「感情・意志などを伝える記号」と「言葉で説くこと」、または signifiant (「記号表現」と signifier 「記号内容」などに峻別されることになる。スピ

一チの意味は一つではなく、聴取者によって変わるといふことである。

こうした「事実」の分裂によって、静止的宇宙は疑わしくなり、やがて量子論やジャック・デリダ (Jacques Derrida) のもとでデコンストラクション (deconstruction) 的考えが生まれる。その考えによれば、分割された事実は「全体」的な性質を失い、さらにその「事実」の知覚が個人的な相違となる。「事実」は一致したものではなく、個人的な現象になるからである。名目論者 (nominalist) 風にいえば、マルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger) やモーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty) は世界というものが我々の知覚と結ばれていることを分からせてくれるのである。マーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan) は「メディアはメッセージである」<sup>(16)</sup> といい、メタファーを広げればその結果は形式以外で内容がないという。

もう一度繰り返せば、「神話」を文芸的な物語のように考える場合、その神話は詩的な虚構や歴史的な物語のように考えられなければならない。その場合の「歴史的な物語」というものは、昔あったことを時間と共に語り継いでいった物語のように考えられる。

一方で、神話が「伝説・昔話」のように理解される場合は、信条 (credo) や選挙の宣伝のように考えてよい。「伝説」というラテン語は「legenda」であり、語根は「legere (読む)」である。「legenda」とは動詞形容詞で、「読むため、読まなければならない」の意味と解釈してよい。その語源によって「神話」の伝達力がはっきり証明されている。

様々な異なる文化に見られる「権力のレトリック」の仕組み、すなわち説得の用語 (語

用論者のジョン・L・オースティン [John Langshaw Austin] の言語行為理論<sup>(17)</sup>によれば「発語媒介的行為」(parlocutionary act)の仕組みができる要因は、神話が創作される要因のように世界中の文化に見出される。従って、その歴史的・社会的な要因は様々な文化に並行的にあり、普遍的であると考えてよいのではないであろうか。中世の蒙昧、ついで19世紀のナショナリズムによって「国民」や「民族」という概念が生まれた。時間が過ぎると共に「近代国家」が成立し、極端な流れは20世紀の組織的大量虐殺にも向かうことになった。中世には叙事詩、民族的な英雄の騎士物語である『ベオウルフ』『ローランの歌』『わがシッドの歌』などが誕生する。そして、18世紀末の産業革命による疎外に応ずるかのようにロマンチズムが出現した。やがてそのロマンチズムの「思想的あるいは神話的な過去への回帰の願望」の結果として、ファシズムは大虐殺の起因となった人種優生のフィクション(「民話・神話」)を創り出した。

神話を「文芸的な物語」として考える場合、神話には「神話的な用語」があるのかどうか、あるいは「神話的な用語」ではなく、再解釈された「普段の用語」しかないのかどうかを考えなければならない。すなわち、デコンストラクション的な解釈がアドルノ的な解釈かという問題である。デリダの文芸理論によれば、文芸的な物語の中の文芸的な性質に応じて、文芸的な用語は再解釈された普段の言語であるという。一方で、テオドル・W・アドルノ (Theodor Wisengrund Adorno) の場合は、美的な言語は「自己言及的」(帰納的に説明できる)言語である。その帰納的に説明できる美的な性質は言語自身のベースであり、物語の美的なルールは物語に定義される

という。

この新しい視点から考えると、昔から神話学者の中にあつた議論に言及することになる。そして「逐語」の支持者、または「アレゴリー」の論理学者に関わることになるであろう。デリダは、神話学のパイオニア、エドワード・B・タイラー (Edward Burnett Tylor) のように、神話が事実であるかどうかは問わず、逐語的に考えなければならないといい、アドルノは、神話がアレゴリーとして考えられるはずだという。

19世紀のヨーロッパに流行した民族学 (民族誌学) の研究は文献学が中心であり、非常に興味深いと思われる問題が語源学のテーマとなった。また、文献学のテキスト批判は、世界 (現実の状態) が適切であると証明できるという。すなわち、世界の現象が物や現象の名前によって定義され、「事実」は「名前 (概念)」に従うというのである。聖書に書いてある通り、「最初に言葉があつた」ということになる。19世紀にドイツ文献学の研究の成果で、サンスクリット語と古典ギリシャ語やラテン語の関係が証明され、インド=ヨーロッパ語科学が生まれた。しかし、ナチとインド=ゲルマン研究は第二次世界大戦後否定されてしまった。他方、日本では『風土記』や『古事記』のような、スピリチュアルなものとして考えられるものについてのテキスト批判 (国学) の研究はまだ熱心に続いている。

一方で、フロイト派 (さらにユング派) の研究によれば、神話は夢で見られる集団的記憶の元型の記録である。すなわち「集団的無意識」 (普遍的無意識) の表現であるという。従って、神話によって原始時代を回想しその時代の事実を理解することができるという。そして、神話は心理的・社会的な世界の実、または独自のコスモスとして考えられとい

う。神話には世界の理解の仕方、「事実」を考える骨子が述べられているというのである。

精神分析学とは別に、20世紀には構造主義のような新学説の方法が神話学の研究に応用されている。クロード・レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) は、ロシア出身のアメリカの言語学者で、プラハ学派のローマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) によって作り出された「対立」の概念を神話の解釈に応用している。レヴィ=ストロースによれば、神話の物語はいろいろな挿話の並記であり、その挿話は「二項対立」を基本にして構造化されるという。こうして、神話的な考えの起源 (誕生) によって事実を解釈・理解することになる。あるいは、その事実の解釈は様々な対立的に構成されたエピソードに表れることになる。確かに、この「神話的な考え」は前に言及した神話に見られる権力や用語による強制的なるものとは別にしてではあるが。

神話学のデュメジル学派の学者はインド=ヨーロッパ語族の神話が祭司・戦士・生産者の三種の機能体系から成ることを明らかにした。言うまでもなく、その三種の機能体系によってインド=ヨーロッパ語族の階級制度は強くなる。ジョルジュ・デュメジル (Georges Dumézil) の下で研究した吉田敦彦によると、その三種の機能体系が日本神話にもあるという。すべての神話は、それぞれの社会の基礎にある構造を表現しながら、その基礎を補強する。階級社会とその組織は神話の物語によって再び定義されていると断言できる。従って、神話の物語とは社会の事実を正当化できる権威であると考えてよいであろう。なぜなら、神話は権力の用語 (レトリック) としてもう一度その機能を働かせるからである。

神話の解釈は時間と共に変化する。神話は

聖書のような「議論の余地のない真実」から「単純な物語」へと変わる。しかし、「物語」というと、現代のreception aesthetics (受容美学<sup>(18)</sup>)が提起する疑問や再解釈を忘れるわけではない。すなわち、神話を受容美学の視点から見れば、神話の読者や聞き手は大切な要素であり、神話は「絶対的」な意味ということではなく、「相対的」な意味しか持たない。神話の意味は、作家や編集者の狙いは別として、読者や聞き手の感性にフィットするだけである。従って、神話の解釈を変えることなく、時代や状況に応じて再解釈できることになる。神話はその「神秘主義」的な性質故に、権力者のイデオロギーによって何回も再解釈され、利用されるのではないであろうか。

受容美学によれば、テキスト作文自体は意味を持っていない。テキストの意味は読者の積極的な読書行為によるのである。従って、作家やテキストに「絶対的な意味」はなく、読者の理解の仕方によっていろいろな意味が生ずるのである。

すなわち、読者のバックグラウンドやテキストに関して持っている知識がそのテキストの趣旨を確定するのである。作家の狙いは別として、テキスト自体は作家の手を離れてしまうので、読まれた時代や状況、読者の状態でそのテキストの意味は異なってくる。従って、テキストに「意味」があるというのは誤った考えであるということになる。

テキストの意味が読者によって異なるとなると、文学的、すなわち文芸的な性質はどんな風に決められるのか。受容美学によると、テキストの価値は読者の「読書歴」によって決定されるという。従って、かつて読んだ本の体験や、読んだ時に受けた影響によって次に読むテキストに価値がつけられるのであ

る。

「読書歴」のもう一つの見方は、読者が古典の作品から現代の最も新しい作品まで、評論家の意見に左右されるのではないか、ということである。評論家の判断が出版の傾向を誘導し、世論のファッションになるというわけである。

しかし、現代のポストモダニズム<sup>(19)</sup>の社会では評論家より、タレントやネットのカリスマ的なブログの意見の方が重視されるであろう。文化の大衆化の副作用で、知識人よりマスメディアパワーのタレントの方がより決定的な力を持つようになったのではないであろうか。

彼らを、ウンベルト・エーコ (Umberto Eco)<sup>(20)</sup>によれば、apocalittici (恐れる人々)と呼んでよいであろう。エーコはその著*Apocalittici e Integrati* (『恐れる人々と同意する人々』<sup>(21)</sup>)で20世紀社会の文化の大衆化によって世論の判断が二つの考え方に分裂される、という。その一つ、apocalitticiの考え方は、「文化」が失われ、知識人の世界が無くなるというもので、マスメディアの広がりによって、「文化」が消えてしまうことを恐れるのである。それに対して、integrati (同意する人々)による、現代のマスメディアの現象も「文化」であり、かつての「知識人」の世界を望むより「新文化」の方がよいという。「新文化」というのは、漫画・映画・雑誌やテレビドラマのように従来は娯楽と考えられていたものである。

受容美学に重要な役割を持っている「読者」という概念は、作家のイメージする読者、思想的に一致する読者もいれば、具体的にテキストを読んでいる読者もいる。そして、テキストに対して読者は「Konkretisiert」(「具体化行為」)によってテキストの美学的なクオリティーを決める。作家の芸術的才能は一応において、読者の美的センスが重要である。従

って、「文芸的なテキスト」とは読者とテキストの関係に強く結ばれていると考えられる。その「文芸性」とは読書の過程を前提とする再解釈によって発見されるのである。

イザーによれば、文学の特性は textual indetermination (「テキストの不確定性」)にある。その「不確定性」は解釈のストラテジーにつながり、読者に再解釈させ、新たな意味を獲得させる。確かに、「再解釈」というとデリダのデコンストラクションに近いと考えられる。その不確定性を解釈するためには、読者がそれを「偏見」としてみるか、新しい考えによって「再解釈」するかを選択しなければならない。

ところで、テキストを理解するためには、作家のコードを解釈しなければならない。

文学作品を支配するコードと、それを解釈するときに私たちが適用するコードとが、完全に「均衡」してしまえば、あらゆる文学は、ロンドンの地下鉄の注意書きと同様の味気ないものになるだろう。イザーの言うもっとも効果的な文学作品は、読者の準拠する習慣的コードや期待に対する新たな批判意識を、読者の中に呼び醒ますような、そうした作品なのである。文学作品を読む際に私たちが持ち込む盲信を、文学作品は疑問に付しそれを変形し、型にはまった認識習慣を「不確なものにし」、そうした上で盲信や認識習慣のありのままの姿をまるでじめて見るかのように私たちに認識させるのである。<sup>(22)</sup>

イーグルトンによれば、テキストの意味は、読者のバックグラウンドや読書歴は別として、作家が内容を理解させるためのコードを含めて、作家の企図を伝えるといえる。本を読むとき、読者は自分の「ストラテジー」に

よって、テキストの中にある「意味のレパトリー」を選び、テキストの意味を作家のコードを利用して解釈する。

しかし、神話の物語の「テキスト」に関していえば、受容美学の論理を利用することができるであろう。神話を個人的に解釈すれば、神話には「集団的」な場面、すなわち集団の意識を一致させて「国家を作る」というのが狙いであることはありえない。一方で、神話とは権力者のイデオロギーを伝えるような物語であれば、神話の意味は個人的にではなく、集団的に考えるべきであろう。

言い換えれば、神話が歴史として価値があるかどうかはともかくとして、またレヴィーストロースの「二項対立」や構造主義的な概念はともかくとして、神話の物語が書かれた時の社会状態を表すとすれば、現代の読者の視点によって再解釈することはできる。

神話の用語にある文芸的な性質を忘れずに、神話の物語を「逐語」的にではなく、その物語に隠されている問題を注意して考えてみよう。言うまでもなく、書かれたか口述されたかを問わず、言語は考えを表現するものである。そのベースにあるイデオロギーは別として、その考えは必然的に非歴史的で、文化を横断するものである。唯一神か八百万の神々かは関係なく、いずれの社会も神を尊敬する。一般的に言えば、それらの神々は社会の権威を反映して創造されたのである。

日本の神話では神を尊敬し、大和朝廷へつなげようとする一方、創生期においては人間的な面も表現されている。

日本神話では、天照大御神はどんなシンボルであろうか。天照大御神は様々な役割を持っているのであるが、日本の大神・大母(万物を生み出した母の意)として考えてよいの

ではないか。ギリシャ神話のプロメテウスのような役割に類似している。

しかし、世界中の他の神話と異なり、人類の恩人はトリックスター<sup>(23)</sup> (trickster) ではなく、母性を持つ恩人である。

確かに、伊耶那美命は偉大な女神・「日本の大母」といえる。日本の島々、神々、そしてほとんどの生き物を産み出した。しかし、「日本の大母」に従う人々を世話をする意味ならば、その役割を担っているのは天照大御神である。天照大御神は人々に稲作の作り方を教え、彼女自身の愛された孫を人間の国を治めるために赴かせることさえ決意した。

天女と稲、すなわち「稲作」の神様の関係に関して、林道義氏は次のように述べている<sup>(24)</sup>。

これ[離別型と稲作の関係]と関係があるのがアマテラスの性格です。何度もお話しているようにアマテラスの治めている天の国はまさに稲作共同体ですね。それからアマテラスは必ず水辺にいる、水辺で子どもを産むなんていうことがいろいろあります。彼女自身イザナギが禊をしたときに水辺で生まれています。それから天の真名井でスサノヲと対決して誓約をして子どもを産んだとなっています。このように水辺と非常に関係が深い。したがって水辺に下りてきて豊穰をもたらすという天女の性格をアマテラスももっており、しかも稲作と非常に関係が深いわけです。

『古事記』の祭式の例として、次のように述べられている。

しか 爾くして、速須佐の男<sup>はやすさのをのみこと</sup>と、天照大御神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>に白さく、「我が心清く明<sup>あ</sup>きが故<sup>ゆゑ</sup>に、我が生める子は、手弱女<sup>たわやめ</sup>を得つ。此に困りて言はば、自ら我勝ちぬ」と、云ひて、勝ちさびに、

天照大御神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>の宮田<sup>みやた</sup>のあを離ち、其<sup>その</sup>の溝<sup>みぞ</sup>を埋み、亦<sup>また</sup>、其<sup>その</sup>の、大嘗<sup>おほにへ</sup>を聞き看す<sup>み</sup>殿<sup>との</sup>に屎<sup>くそ</sup>まり散しき。故<sup>かれ</sup>、然<sup>しか</sup>為れども、天照大御神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>は、とがめずして告らさく、「屎<sup>の</sup>の如<sup>ごと</sup>きは、酔<sup>よ</sup>ひて吐き散すところ、我がなせ<sup>な</sup>の命<sup>こと</sup>、如此<sup>かくし</sup>為つらめ。又、田<sup>あ</sup>のあを離ち、溝<sup>みぞ</sup>を埋むは、地<sup>と</sup>をあたらしところ、我がなせ<sup>な</sup>の命<sup>こと</sup>、如此<sup>かくし</sup>為つらめ」と、詔りて直<sup>な</sup>せども、猶<sup>なほ</sup>其<sup>その</sup>の悪<sup>あ</sup>しき態<sup>わざ</sup>、止<sup>や</sup>まずして転<sup>う</sup>たあり。天照大御神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>、忌服<sup>いみはたや</sup>屋<sup>いま</sup>に坐して、神御衣<sup>かむみそ</sup>を織<sup>あ</sup>らしめし時に、其<sup>その</sup>の服屋<sup>はたや</sup>の頂<sup>いた</sup>を穿ち、天<sup>あめ</sup>の斑馬<sup>ふちうま</sup>を逆剥<sup>さか</sup>ぎに剥ぎて、壘<sup>う</sup>し入れたる時に、天<sup>あめ</sup>の服織女<sup>はとりぬ</sup>、見驚<sup>みおど</sup>きて、梭<sup>ひ</sup>に陰上<sup>ほと</sup>を衝<sup>つ</sup>きて死<sup>し</sup>にき。<sup>(25)</sup>

この部分で述べられており、また現在も皇室行事の一つである「大嘗」<sup>(26)</sup> (三行目) や[神御衣] (七行目) などの概念を見ると、祭式の作法に強い関係があることが見られる。

このエピソードは、宗教的な意味しか伝達しないわけではない。神話には宗教的な規範もあれば、社会的な規範も見られる。神話の起源によく出るのは、性に関する規範である。

人間とは動物であり、生存本能も当然もちあわせている。従って、人類が減びないように、人類に対して危険、すなわち種の存続にマイナスとなることはタブーとされている。すなわち、ダーウィン学派の「生存競争」ということである。例をあげると近親相姦などが世界中でタブーとされている。

確かに、同じ規範でも法律より宗教の方が守りやすいかもしれない。この世の危険よりあの世の危険の方が恐ろしいと感じられているのではないであろうか。「言霊」や「言拳」<sup>(26)</sup> の迷信的な古代社会には、神話の中に禁止されているものは非常に恐れられた存在であったことに違いない。宗教は古代の世界では解決の糸口の役目も果たした。ロバ



ート・ブリフォールト (Robert Briffault) が『宗教に於ける性』( *Sex in Religion* ) の中で次のように述べている。

「宗教」といふ名辞が近代人達の心理に呼び起すところの概念は、存在の理解づけといふ概念である<sup>(27)</sup>。

具体的な神話に於けるタブーの例として、日本神話には伊耶那岐命と伊耶那美命に水蛭子という奇形児が生まれた理由は、伊耶那岐命と伊耶那美命の近親相姦の肉体関係の結果だと解説する研究者もいる<sup>(28)</sup>。「近親相姦のタブー」に関する研究者として、レヴィ=ストロースをあげることができる。

一方で、天照大御神が高天原の石屋戸に隠れたエピソードは、古代社会の「産屋」に関係があるのではないかと筆者は考える。または、月経中の女性を不純物として扱い、村から離れたところへ追いやる。

天照大御神は女神らしいイメージと武人らしいイメージとを併存している。天照大御神はギリシャ神話の武人アテーナイに似ているだけではなく、母らしいデーメーテルも似ている点がある。一方で、プラトンが *Συμπόσιον* (『饗宴』) に述べたように、アフロディーテーに処女の側面もあれば、遊女<sup>(29)</sup>の側面もある。神話に登場する神には、東西を問わず共通するものを見出すことができる。これは神話を創作した人間としての共通性であろうか。

天照大御神の「母らしい」場面とは、『古事記』や『日本書紀』に登場するが、日本では古代から「母と息子」という関係が強い。そのような関係について、『民俗学辞典』には次のように述べられている。

日本では、「母と息子」という布置が必

要な役割を果たす昔話が広く伝搬している。また、母子神を祀った神社も多くある。ただし、多くの日本人研究者は、それらが古代の処女の母信仰の名残であるとするときには懐疑的である。<sup>(30)</sup>

天照大御神の女性らしい役割に関して、高天原の石屋戸のエピソードは、女性の性質に関係があるとして理解することができる。ポスト・ウィーラー (Post Wheeler) によれば、須佐之男命の悪業によって亡くなった処女は<sup>(31)</sup>、大日靈のこと、天照大御神の妹か天照大御神自身なことを示す。その悪業とは、強姦を意味する。

エリッヒ・ノイマン (Erich Neumann) によれば、天照大御神が高天原の石屋戸、すなわち洞窟に隠れたエピソードとは、

容器、腹、そして大地の性格をひとつに統合したものであり、しかも冥界という暗い領域に属している<sup>(32)</sup>。

須佐之男命を高天原から追放することは、「罰すること」として考えることはよいであろう。確かに、罰することは大切であり、更に、髭と手足の爪を切ることはシンボリックな睾丸卵巣除去 (精巣除去) として理解することができる。

『古事記』には「女陰」に関係がある興味深いエピソードがある。それは、伊耶那美命の死である。

伊耶那美命が最後に火の神を出産した時、女陰を焼かれて亡くなった。その「女陰を焼かれて」というのは、オーガズムに達する表現なのであろうか。そうだと仮定すると、伊耶那美命は母親としてではなく、女性として満足し、快樂を感じて、亡くなる。これは心理分析的に見ると、日本神話には女性達に性

欲を禁止しているようなイデオロギーが反映すると筆者は考える。

日本神話にも前述したギリシャ神話と同様に性差別が存在すると考えてよい。河合隼雄氏の「女性の神秘」に関しての説明によると、

ここでのアマテラスは、女性の仕事である機織りに携わっている。彼女は以前に比べると女性的になったが、まだ十分ではなかった。完全に安全に女性になるためには、いわば完全なる接触、すなわち、致命的一撃をアマテラスは受けなければならない。[省略]日本神話では、男性の侵入者は神馬にまたがるのではなく、逆剥ぎにした斑入りの馬、すなわち、男性の性の本能的側面を投げ込んでくる。[省略]処女であるアマテラスは、ついに身をもって男性の侵入を体験する。至高の太陽と対をなすスサノヲによる侵入を体験し、処女の女神は母となるのである。<sup>(33)</sup> (なおテキストはコンマ、ピリオドであるが、読点、句点に変えた)

天照大御神の誕生が「不純」の概念に関係があるのではないであろうか。天照大御神は、父親の伊耶那岐命のお清めの結果、誕生した。このお清めが必要だった理由は、伊耶那岐命が伊耶那美命の秘密の場面を見たからである。

最後に、スペイン語の「orate」(オラテ)という言葉に言及したい。オラテとは「発狂している人」の意味で、古代ギリシャ語の *os, oris* (「口」の意味) が語源である。英語・フランス語・カタルーニャ語など(スペイン語では *oráculo*) の *oracle* (「信託」, 「託宣」) の表現も同語源である。従って、「発狂している人」が「神の言葉を話す」人である。

その話とは、語源的にいうと普段の話と異なって、「神の話」になり、従って「オラテ」は「神々の話を言うことができる」人物になる。

すなわち、「狂気の人」は異常を話せる人、霊媒またはシャーマンである。狂気の人モシャーマンもこの世界と「他の世界」の両方に住むと考えるとよいであろう。というのは、その「他の世界」の概念は「死者の世界」か「非現実の世界」かどうかに関わらず、シャーマンは「現実の世界」と「この世界の現実の向こうにある世界」とを分けているからである<sup>(34)</sup>。「他の世界」はシャーマンや狂気の人々の心や精神以外には存在しない、普通の人々に感じられない世界として考えるとよい。非現実の世界ということである。言い換えれば、狂気の世界とシャーマニズムのレトリック(この文脈で「神話のレトリックとして考えるとよい」)は両方とも事実・論理を超える言語であると思われる。その結果、狂気の、または神話の言語に事実を越えた事実を表現する。その言語は空想的・夢想的あるいは痴呆的な用語のように考えられる。

もう一つ注意しなければならない点は、神話の「詩的な」性質の面である。アドルノがデリダかの議論は別として、美学での文芸用語の理論は神話の物語にも応用できるということである。すなわちアドルノによると、文芸とは「自己創造の力」と定義され、一方でデリダによると文芸は普段の用語であり、その「普段的言語に内包された意味」によって文芸・詩のような性質が隠されているという。

美学者の論理を神話の物語に応用すると、神話の物語は「この世の言葉でこの世でない世界を表現」するか「あの世の言葉でこの世でない世界を表現」するかのように考えるとということになる。言い換えれば、タイラーの

ように神話を「逐語」的に理解する神話学者が、神話を「アレゴリー」的に解釈する神話学者かの討論になってしまうのではないであろうか。

「この世ではない世界の表現」、すなわち「狂気」や「シャーマン」の用語とは、どのように「異常」の世界を示すであろうか。狂気の用語の文芸的な性質に関して<sup>(35)</sup>、先ず20世紀の言語哲学、または語用論学の論理を参考すると、「事実」や「常識的な知識」の理解の仕方を見直す必要が出てくる。「事実」や「日常的な判断力、良識のある分別」というものは何であるかの問題については、オースティンの「意味契約」<sup>(36)</sup>を考えるべきであろう。そして、権力者に反対するスピーチ（推理能力）を「精神異常・痴呆」として非難される傾向はフォーコーが『狂気の歴史 古典主義時代における』（*Histoire de la folie à l'âge classique*, 田村俣訳、新潮社、1975年）の中で分析した。更に、20世紀の1950、60年代の反精神医学（antipsychiatry）の流行を参考にすれば、「狂気」の概念に隠されている「社会を転覆させること」の意味もはっきり証明できる。

フロイトは、社会のプレッシャーに対して人々の中に神経過敏の症状が見られると指摘した。

フロイトは非常に文化的な人間であったが、彼によれば文明は人間の知力達成感を抑え、抑圧的な要素として考えられた。その抑圧の結果として、大多数の人々は神経症にかかる<sup>(37)</sup>。

フロイトによると、宗教的な儀式な役割は個人と社会を結びつけることであり、社会のプレッシャーの結果として受けた神経過敏症状を社会の儀式に同化させることである。そ

れらの儀式は「プレッシャーを解放する」ものであり、集団という意識を生じさせる<sup>(38)</sup>。しかし、その「集団的な熱情」は簡単に「集団的なヒステリー」に成り得る。その現象の最もよい例としてあげれば、古代ギリシャのエウリピデス<sup>(39)</sup>の『バックスの信女』であろう。長い間の戦争やそれによる精神的不安定さ、また男性中心の古代ギリシャ社会の中で、プレッシャーを受けた女性たちは「プレッシャーから解放」されようとしてキテリオン山で行うディオニソスの祭りに男性を入れずに自由に遊び、集団的にヒステリー化してしまう。しかし、その結果として、女王のアガウエはディオニソスの祭りの秘儀を見た自分の息子ヘンテオスを殺すことになるが、この問題はもう一つの大きなテーマであり、稿を改めて考えたい。

反精神医学（antipsychiatry）の動きに関して、1950、60年代の映画にあらわれる精神病院と威圧的な機械との結びつき、その精神病院に対しての強い異議は非常に興味深い。権力者の威圧的な機械として利用されたロボットミーを中心した例としては、ケン・キージー（Ken Kesey）の小説の映画化で、ミロシュ・フォアマン（Milos Forman）の『カックウの巣の上で』（*One flew Over the Cuckoo's Nest*）<sup>(40)</sup>があり、また『バックスの信女』のような「集団的なヒステリー」の要素はテネシー・ウィリアムズ（Tennessee Williams）の戯曲を映画化したジョーセフ・L・マンキーウィッツ（Joseph L. Mankiewicz）の『去年夏突然に』（*Suddenly Last Summer*）<sup>(41)</sup>に見られる。

言い換えれば、「歴史」とその歴史に従う「現在の事実」は疎外的な言葉や疎外的な言葉に反対する言葉の並列（並記）として再解釈できる。確かに、「疎外」の概念の意味は普遍的に考えられない。疑いも無く、その疎

外のマルキシズム<sup>(42)</sup>的な意味を忘れることはできない。一例をあげれば、現代日本の「ニート」社会では、「ホームレス」は「ワーキング・プア」より疎外されていない。しかし他方で、普通のサラリーマンより、ホームレスは疎外されるものであろう。言うまでもなく、「疎外反対主義」の言葉は社会を転覆させるとして解釈され、許されるものではない。

この偏狭(狭量)は権力のレベルでは譴責として現れ、一般社会のレベルでは汚名を着せられて非難される。言い換えれば、磔を許さない現代の世界では、権力者に睨まれた予言者は狂気のレッテルをはられ、精神病院に放り込まれ、世捨人にされる。殺されるか投獄される「厄介者」は殉教者となるから<sup>(43)</sup>、革命に触媒作用を及ぼす危険性があり、精神病院で消してしまう方が効果的な選択であろう。権力に反対しても社会的に危険でない人々の場合、すなわち権力に同意しない人々を精神病院に放り込むことを正当と言えないときには、「村八分」(the black sheep)のような社会の「差別システム」によって、相いれない意見を「社会から隔離する」。その結果は、批判的・反対的な意見がなくなり、同質な社会が生まれる。

特に、欧米の「個人主義」と異なって「国民の集団主義」の考え方が強い東アジアの社会には、同質な概念は非常に威圧的な道具になる。

同質化させる道具の一つは、宗教であろう。フロイトによれば、社会や文化のルールに対して個人は神経過敏には精神的不安定になり、それぞれの社会で生じた神経過敏には精神的不安定さが宗教的に解消されるという。

またフロイトによれば、神は人間を自然の恐ろしさや人生の苦しさやと和解させる役割を持っている。特に死の恐怖や文明的な生活の

厳しさが宗教的に癒され、人々は運命に身を任せるといふ<sup>(44)</sup>。すなわち、運命に対して人間の無力さが、宗教的な意識を生じさせるのである<sup>(45)</sup>。

このバックグラウンドには、権力の用語以外の言葉、すなわちアルターナティブ alternative thinking (代替的思考)文化が「新しい神話」に表れていると考えてよいのではないであろうか。「新しい神話」というのは、ニュー・エイジ<sup>(46)</sup>の考え方、あるいはパウロ・コエーリョ (Paulo Coelho) の『アルケミスト 夢を旅した少年』(Alquimist, 山川紘・亜希子訳、地涌社、1994年) やリチャード・バック (Richard Bach) の『かもめのジョナサン』(Jonathan Livingston Seagull, 五木寛之訳、新潮社、1974年) などの物語に反映される「新哲学」ということである。すなわち、現在の神話にはもう一度社会の制度を疑う「新しい言葉」を語り得る機能があるということである。

神話が事実かどうかを別として、神話は神話である。従って、理想化であると考てよい。

結論として、カタルーニャ<sup>(47)</sup>のユレンス・ダ・ヴィションガ (Llorenç de Vilallonga) 著『ベアルン(Bearn)』を引用しよう。

No hi ha més paradisos que els perduts.  
(天国とは失われたものでしかない)。

注

- (1) ヨーロッパ文学の場合は、詩の形で語られた叙事詩が多い。『イリアス』『ベオウルフ』『ローマンの歌』『わがシッドの歌』などを参照。
- (2) ニコス・カザンザギス (Nikos Kazantzakis) の小説、『キリスト最後のころみ』(*The Last Temptation of Christ*, 児玉操訳、恒文社、1982年) に基づいた1988年の映画。
- (3) ジェンダー論は、比較文学におけるフェミニズム論を契機として発展したもので、社会での男性中心的なイデオロギーを批判し、そのイデオロギーの捉え方自体を再検討する運動ともなっている。比較文学におけるフェミニズム論の代表格として、ジュリア・クリステバ (Julia Kristeva) などを参照。
- (4) マルクス主義の基礎理論 (史的唯物論) による、歴史の基本的な動因として考えられる経済的または政治的に対立する階級間の争い。
- (5) フロイトによれば、芸術とは性欲が抑圧された性衝動である。
- (6) *Madwoman at the Attic. — The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* —. 1979 (Yale University Press). (『屋根裏の狂女』山田晴子・園田美和子訳、朝日出版社、1986年)
- (7) ライヒ 『性と文化の革命』(*The sexual revolution*) 中尾ハジメ訳、勁草書房、1969年、を参照。
- (8) フーコー 『監獄の誕生 監視と処罰』(*Surveiller et punir : naissance de la prison*) 田村俣訳、新潮社、1977年、を参照。
- (9) イーグルトン 『文学とは何か』(*Literary Theory. An Introduction*) 大橋洋一訳、岩波書店、1997年。
- (10) 天動説ともいう。
- (11) 地動説ともいう。
- (12) 2009年に最初の黒人米大統領 (第44代) に成ったバラック・オバマ (Barack Obama) の選挙運動のモットー。
- (13) 現象学の創始者。
- (14) *Phänomenologie*. 意識に直接的に与えられる現象を記述・分析するフッサールまたはメルロ=ポンティなどの哲学。
- (15) 構造主義言語学の祖。
- (16) Mc Luhan, Marshall & Fiore, Quentin, *The medium is the message*. New York, 1967 (Bantam Books). (『メディアはメッセージである』南博訳、河出書房新社、1955年)
- (17) *Speech Act Theory* のこと。分析哲学の日常言語学派の中心的指導者オースティンの研究によれば、話すことは「言語行為」として考えられ、それらの「言語行為」とは「事実確認的」行為 (constative act)、「発語内的」行為 (illocutionary act)、「発語媒介的」行為 (parlocutionary act) の三種に分かれる。
- (18) ドイツの文芸評論家、ヴォルフガング・イザー (Wolfgang Iser) が唱えた。『行為としての読書 美的作用の理論』(*Der Akt des Lesens: Theorie ästhetischer Wirkung*) 響田収訳、岩波現代選書、1982年、参照。
- (19) ポストモダニズムとは20世紀末頃の変化が反映されている。その世界は自己中心的で、多元論的である。この時代の美的価値は、日常の体験に由来している。  
ポストモダニズムについて多くの評論家は、それが現代のどこにでもある懐疑的な態度に関係している文化だとしている。
- (20) イタリアの記号学者・作家。 *Apocalittici e Integrati* で、エーコはマスコミを研究し、現代社会の「英雄神話」を分析した。エーコによれば、アメリカの漫画のスーパーマン (Superman) とは大衆文化 (mass culture) の結果であるという。
- (21) Eco, Umberto. *Apocalittici e integrados ante la cultura de masas*. Barcelona, 1973. (Lumen)
- (22) イーグルトン、前掲書、123頁。
- (23) 原始民族の民話、神話に登場し、通例文化

- 英雄 (culture hero) の役をする。
- (24) 林道義 『尊と巫女の神話学』 名著刊行会、1990年、155頁。
- (25) 『古事記』 上巻 (新編日本古典文学全集1) 小学館、1997年、63頁。
- (26) 古代では「ことあげ」は不吉なものとされた。
- (27) 松村武雄 『神話学言論』 上巻、ゆまに書房、1980年、579頁。
- (28) 近代科学によれば、近親相姦の肉体関係があるからといって遺伝子が弱められることは限らないという。しかし、スペースの都合もあり、その課題に対して著者は意見を略することとする。
- (29) 「好色な女」の意味。
- (30) 柳田国男監修 『民俗学辞典』 東京堂出版、1951年、480頁。
- (31) 「天の服織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき」前掲 『古事記』。
- (32) イマン 『グレート・マザー 無意識の女性像の現象学』 (*The great mother: an analysis of the archetype, translated from the German by Ralph Manheim. 2<sup>nd</sup> ed.*) 福島章ほか訳、ナツメ社、1982年、44頁。
- (33) 河合隼雄、『日本神話と心の構造』 岩波書店、2009年、212-214頁。
- (34) 確かに、精神病によって、この二つの世界を行き来する、狂気の人もいれば、現実のセンスを失い、非現実的な世界にしか居られない人もいる。
- (35) 「精神異常」とか「天才」という空想家・神秘家に関しては、Redfield Jamison, Kay, *Touched with Fire: manic-depressive illness and artistic temperament*, 1993などを参照。
- (36) 言語行為という概念を指摘した。ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau) の「社会条約」の概念に近い、言語に存在する「因習・慣習」的な要素という「意味契約的な」局面を分析した。
- (37) Storr, Anthony, *Freud. A Very Short Introduction*, p.105. Oxford, 2001. (Oxford Univ. Press)
- “As already indicated, Freud was a highly civilized man himself, but nevertheless regarded civilization as oppressive, since, in his view, it imposed more restraints upon instinctual fulfilment than most human beings could tolerate without developing at least some neurotic symptoms”.
- (38) “In an earlier paper, Freud had laid more emphasis upon the dangers threatening the individual from within. He noted the similarity between religious practices and obsessional rituals. In his view, obsessional rituals were was of protecting the ego from the emergence of phantasies, thoughts, or sexual impulses, which the individual had repressed; and, at the same time, a displaced and partial expression of those impulses”.
- (Storr, A., *op.cit.*, p.111)
- (39) 古代ギリシャの悲劇詩人。
- (40) 1975年に映画化された。
- (41) 1959年に映画化された。
- (42) マルクス主義。Karl Marx と Friedrich Engels によって確立された弁証法的史的唯物論に基づく共産主義思想。
- (43) イエス・キリスト (Jesus Christ)、マーチン・ルーサー・キング (Martin Luther King)、ガンジー (Gandhi)、マルコム X (Malcolm X)、ネルソン・マンデラ (Nelson Mandela) らを参照。
- (44) “They [the gods] must exorcize the terrors of nature, they must reconcile men to the cruelty of Fate, particularly as it is shown in death, and they must compensate them for the sufferings which a civilized life in common has imposed on them”. (SE, XXI.18)
- (45) “The derivation of religious needs from the infant's helplessness and the longing for the father seems to me incontrovertible, especially since the feeling is not simply prolonged from childhood days, but is permanently sustained by fear of the superior power of Fate. I cannot think of any need in childhood as strong as the need for a father's protection”. (SE, XXI.72)

(46)ニュー・エイジとは、1950年代から60年代にかけてヒッピーやビート族と呼ばれた若者たちによるムーブメントのように、80年代に生まれた思想的潮流。西洋的価値観を否定して、伝統的な超自然を重視し、「スピ

リチュアリティ」または東洋らしい神秘主義に戻る傾向があった。

(47)スペインとフランスにまたがる地域。